

國學院大學學術情報リポジトリ

条件表現の全国分布に見られる経年変化：
認識的条件文の場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三井, はるみ, Mitsui, Harumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000549

条件表現の全国分布に見られる 経年変化

— 認識的条件文の場合 —

三井はるみ

1. はじめに

本稿では、約30年間隔で行われた2回の方言分布全国調査である『方言文法全国地図』（GAJと略称する）と「全国方言分布調査」（FPJDと略称する）の結果を比較し、順接仮定の条件表現（以下これを「条件表現」という）について、全国的な変化の動向の概観を得ることを目的とする。三井（2019）で基本的な仮定条件文である予測的条件文を取り上げたのに続き、本稿では、予測的条件文と仮定のタイプが異なり、全国諸方言で他の条件文とは異なる形式が用いられる傾向が顕著である認識的条件文を取り上げる。2回の調査の概要は表1のとおり。

表1 『方言文法全国地図』と「全国方言分布調査」の概要

	方言文法全国地図（GAJ）	全国方言分布調査（FPJD）
調査実施	1979-1982年	2010-2014年
地点数	807	554
話者（原則）	1920（大正9）年以前生まれの移住歴のない男性、各地点1名 調査時60～75歳	1940（昭和15）年以前生まれの移住歴のない男女、各地点1名 調査時70歳以上
調査者	国立国語研究所員・地方研究員（主として大学教員）他73名	全国の方言研究者（国立国語研究所員・大学教員他）100名
調査項目数	文法、表現法 267	音声、語彙、文法 211
調査法（文法）	臨地面接質問調査 共通語翻訳式	
スタイル	話者自身が、くつろいだときや、ごく親しい人と話すときに使うことば	
条件表現項目	21	12
刊行物	国立国語研究所（1989-2006）	大西拓一郎編（2016）
データ	https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj_all/gaj_all.html	https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjd/fpjd_index.html

三井（2019）表1を加筆修正

2. 方言の条件表現の全国分布概観

条件表現は、複文の前件と後件の二つの事態の仮定的な因果関係を表す表現である。共通語の基本的な形式は「ば」「たら」「と」「なら」の4形式であり、そのほかに「ては」を加えることができる。これらの形式は、それぞれ中核的な意味を持ちつつ、互いに用法が重なり合いながら使い分けられている。

方言の条件表現形式の全国的な地域差の概略を表2に示す。GAJの以下の分布図と、GAJで調査されなかった2用法については、FPJDとGAJの準備調査の結果から、本土方言に見られる語形と分布を整理したものである（三井2019表2再掲、日高2003・2017、三井2009・2010参照）。

- ・GAJ 128図「きのう手紙を書けばよかった」（反事実的条件文）
- ・GAJ 167図「あした雨が降れば船は出ないだろう」（予測的条件文、文末：述べ立て）
- ・FPJD G-049「そこに行ったら電話しろ」（予測的条件文、文末：命令）
- ・GAJ 169図「おまえが行くとその話はだめになりそうだ」（予測的条件文、後件が望ましくない事態で文全体が〈回避の必要性〉の伝達の意味）
- ・GAJ 225図「そっちへ行ってはいけない」（予測的条件文、文全体が〈禁止〉の伝達の意味）
- ・GAJ 133図「手紙を書くなら、字をきれいに書いてくれ」（認識的条件文）
- ・pre-GAJ 表152「あの人の家に行くと、いつもごちそうしてくれる」（総称的条件文）
- ・GAJ 170図「そこに行ったらもう会は終わっていた」（事実的条件文）

方言の条件表現では、方言特有の形式は、中部（愛知県、岐阜県）等の「トサイガ」、九州（佐賀等）の「ギー」、東北北部の「タバ」「タッケ」などがあるものの、本土では全体に見ても多くない。目立つのは、共通語で類義関係にある「バ」「ト」「タラ」「ナラ」の形式が、一つの用法の中でそれぞれ固有の地理的領域を持って分布している点である。共通語と同じ形式でも、方言によってカバーする用法の範囲や、構文的・意味的制限のありようが異なる。

また、条件文のタイプに着目すると、全国の方言で、反事実的条件、予測的条件、総称的条件、事実的条件では、それぞれの方言ごとに区別の違いはあるものの、タイプ間で共通の形式が現れる。しかし認識的条件だけは、ほとんどの方言で、それらとは違った形式が当てられている。東北・関東の「(ン)ダラ」、関東・中部と中国以西の「(ン)ナラ」、近畿・四国北東部の「ンヤッタラ」などである（近畿・四国北東部方言では「タラ」が広い用法で用いられるが、認識的条件で現れるのは断定の「のだ」相当形式を含んだ形であり、他タイプに現れる形式とは異なっている）。このことは、認識的条件文の持つ文法的性質と関わるものと見られ、

表2 条件表現形式の全国的地域差（本土）

		九州南西部		中国・四国南西部・九州北東部		近畿・四国北東部		関東・中部		東北南部		東北北部	
反 事 実 的	128国 書けば	バ	カケバ	カケバ				カケバ		カケバ		カケバ	
		タラ				カイタラ							
		ト	カクト※1							カクト			
		ナラ	カクナラ※1										
		他	カクギー※2										
		バ	フレバ	フレバ				フレバ		フレバ		フレバ	
		タラ				フッタラ							
		ト								フルト			
		ナラ	フルナラ※1										
		他	フッギー※2										
		バ											
		タラ		イッタラ	イッタラ	イッタラ	イッタラ	イッタラ	イッタラ				
予 測 的	FPJD G-049 行ったら (文末: 命令)	ト											
		ナラ	イッタナラ※1										
		他	イクギー※2 イッタトキ※3	イッチカラ※4									
		バ	イケバ	イケバ※5				イケバ※7				イケバ	
	169国 行くと (避けた 後件)	タラ				イッタラ							
		ト	イクト	イクト		イクト		イクト		イクト			
		ナラ											
		他	イクギー※2					イクトサイガ※8					
	225国 行っでは (禁止)	バ											イケバ
		タラ				イッタラ							
		ト	イクト										
		ナラ											
		他	イクギー※2	イッチャー				イッチャー		イッテ			
		バ		カケバ※6									
		タラ											
		ト											
認 識 的	(Nは準体 助詞、形式 名詞)	ナラ	カクナラ カクNナラ	カクナラ カクNナラ			カクナラ カクNナラ						
		他	カクギー※2		カクNヤッタラ	カクダラ カクNダラ カクジャー※9	カクNダラ	カクNダラ	カカバ※10 カクカラ※11				
		バ											
		タラ											
	pre-GAJ 表152 行くと	ト	イクト	イクト		イッタラ		イクト		イクト			
		ナラ	イクナラ※1										
		他	イクギー※2					イクトサイガ ※8					
		バ											
総 称 的		タラ	イケバ	イケバ									
		ト	イクト	イクト									
		ナラ	イクナラ※1										
		他	イクギー※2					イクトサイガ ※8					
	170国 行ったら	バ											
		タラ	イッタラ	イッタラ	イッタラ	イッタラ	イッタラ	イッタラ					
		ト											
		ナラ											
事 実 的		他	イッタレバ※1 イタギー※2									イッタバ イッタツケ イッタレバ※12	
		※1 熊本等		※4 大分等		※7 長野等		※10 岩手等					
		※2 佐賀等		※5 山陰等		※8 愛知・岐阜等		※11 秋田等					
		※3 鹿児島等		※6 高知等		※9 山梨		※12 岩手・山形等					

※1 熊本等
※2 佐賀等
※3 鹿児島等

※4 大分等
※5 山陰等
※6 高知等

※7 長野等
※8 愛知・岐阜等
※9 山梨

※10 岩手等
※11 秋田等
※12 岩手・山形等

- ・国立国語研究所編「方言文法全国地図」(GAJ)、同「方言文法全国地図の準備調査結果」(pre-GAJ)、同「全国方言分布調査」(FPJD) から、条件形式を地域ごとに整理して示した。主な形式に網掛けを施した。
- ・地点数は少ないがある程度まとまった分布をなす形式には※を付して表下に主な使用地域を示した。
- ・「ーバ」にはカキヤー等の融合形を含む。その他も同類の違いはまとめている。

注目される。(1)

3. 認識的条件文

このような条件表現全体の広がりの中で、本稿では認識的条件文「手紙を書くなら、字をきれいに書いてくれ」(GAJ 133/FPJD G-051)を取り上げる。

認識的条件文は、前件の事態は既に実現しているか実現が確実であるが、その真偽について話し手は知らず、話し手の認識においては未知の事態である、というタイプの条件文である。このため前件事態はすでに実現している事実的な場合が典型的とされる。共通語では主として「なら」が認識的条件を担う。共通語の「なら」は「ば」「と」「たら」と異なり、過去形に接続して「たなら」の形をとることができ、従属節内でテンスの対立を持つ。このことが、認識的条件というタイプの条件文を可能にしているとされる。(有田2007・2017、前田2010)

認識的条件文には前件が未実現の事態の場合もある。これは、成立することがほぼ定まっている(「予定」として決まっている、実現が確実と見込まれる情報である、相手の様子や信念から推測される、等)ような場合であり、典型的な假定条件文である予測的条件文と異なる。また、認識的条件文は、前件に、受け取ったばかりの情報を提示することもある。

GAJ/FPJDの調査文「手紙を書くなら、字をきれいに書いてくれ」は、前件の「手紙を書く」も後件の「字をきれいに書く」も仮説的で未実現の事態である。この点で、予測的条件文と同じく仮説的条件の性質を備えている。一方、前件事態の「手紙を書く」については、相手の様子等から推測したり、「手紙を書く」と聞いていたりして、話し手がその実現を確実なものと捉えている含みがある。後件は前件を踏まえた話し手からの依頼である。この点で予測的条件文と異なる。

予測的条件文と認識的条件文の違いは、前件と後件の時間的な関係にも現れる。一般的に、条件と帰結は、条件の方が帰結より先に生起するものである。予測的条件文の前件と後件は、そのような時間的順序関係にある(前件の未実現事態が実現した場合に生起する結果を後件に述べる。例:「あした雨が降れば船は出ないだろう」)。しかし認識的条件文では、前件の条件の方が後件の帰結より先に生起する場合もあるが(「郵便局に行くなら、切手を買ってきてくれ。」、前件が後に生起する場合(「この本、読むなら貸すよ」)や、今回扱う「手紙を書くなら、字をきれいに書いてくれ」のように同時に生起する場合もある。

以下では、このような認識的条件文の文法的性質が、全国分布の経年変化に何らかの形で反映されているか、反映されているとしたらどのような形で反映されているか、ということを観点の一つとする。

以下、4節でGAJとFPJDの分布の比較を行い、5節でそこに見られた安定した形式と衰退した形式の違いについて整理する。6節では中央語史の流れを踏ま

え、GAJからFPJDへの変化が認識的条件文の分化の進行と完了と捉えられることを述べる。7節では、九州北西部の「ギー」について、認識的条件文を分化させる独自の方向の変化がうかがわれることを述べ、8節では認識的条件文の分化とは異なる方向示すと見られる例について触れる。9節で、FPJDで新たに調査された過去の認識的条件文の全国分布を概観して、6節の見方が支持されることを述べる。10節はまとめである。

なお筆者はこれまでに、三井(2009・2010)でGAJ所収の順接仮定条件表現項目の全国分布を概観し、三井(2016)でGAJとFPJDの項目ごとの簡略な比較を行った。また、三井(2019)では、それらのうち予測的条件文についてより詳細な経年比較を行い、両者の間に、特定形式の意味用法の汎用化、体系の単純化といった、分化よりも統合に向かう変化の方向性が見られることを指摘した。本稿では、タイプの異なる条件文である認識的条件文を取り上げ、引き続き、方言の条件表現の体系全体の変化の方向という観点を念頭に置いて、比較と考察を行う。

4. 認識的条件文を担う形式の経年変化

図1にGAJ 133図、図2にFPJD G-051の地図を示す。

まず図1でGAJの分布を確認する。表2で見たとおり、他のタイプの条件文と異なり、全国的に、断定の助動詞に由来する形式や、断定の助動詞を含む形式が広く分布している。「カクナラ」「カクンナラ」は、関東・中部と中国・四国・九州に分布する。東北には、「ナラ」と同じく断定の助動詞に由来する「ダラ」「ダバ」と各地特有の準体助詞・形式名詞を用いた、「カクゴツタラ」(「カク」準体助詞/形式名詞「ダラ」類)、「カグアダバ」(「カクンダ(ラ)バ」類)等の多様な形が見られる。近畿は「カクンヤッタラ」で、他の仮定条件文と同じく「タラ」が用いられるが、断定の助動詞に接続した形式である。「タラ」による形式とそれ以外とが周囲の分布をなしている点は、他の条件文と同様である(三井2009・2019)。山梨県のみに分布する「ジャー」も、「デワ」の融合形であり、断定の助動詞を含む。

また、古代中央語の代表的仮定表現形式である「未然形+バ」の形(-aba形)である「カカバ」が現れる。岩手県にまとまって分布する(ただし岩手県のこの形式は、古代中央語の「未然形+バ」とは由来を異にするものである⁽²⁾)ほか、長野県秋山郷・開田・奈川、三宅島、八丈島、鹿児島県喜界島・奄美大島宇検村(語形は「カカバヤ」)・与論島(語形は「カカポー」)に見られる。また、沖縄本島に多い「カクラバ」類(那覇市首里では「カチュラー」)は、融合語幹(主動詞が「いる」にあたる動詞「ツウン」と複合した語幹)の「未然形+ば」にあたる形で、基本語幹の「未然形+ば」にあたる「カカバ」とともに、意味の違いを持って使われているようである(国立国語研究所1963: 69-70、津波古敏子1997:



図1 手紙を書くなら字をきれいに書いてくれ(認知的条件文)(GAJ133 図略図)



図2 手紙を書くなら字をきれいに書いてくれ(認知的条件文)(FPJD G-051)

380)。古代語の「未然形+バ」が、広く仮定条件全般を担う形式であったのに対し、現代方言の「未然形+バ」(-aba形)は、133図のような、認識的条件文の用法に偏る傾向がある⁽³⁾。図1で東北北部(秋田県南部・山形県庄内地方・青森県下北半島)に(原因・理由ではなく)仮定条件を表す「カクカラ」という形があるが、この「カラ」も、形容詞の未然形語尾(「高カラバ」等の「カラ」)が独立した形式である。

以上は、予測的条件文等他のタイプの条件文にはほとんど見られず、主に認識的条件を担う形式として用いられているものである。

一方、山口県を中心とした中国地方から大分県にかけてと、高知県、および、岐阜県と長野県の県境地域に、「仮定形+バ」(-eba形)の融合形「カキヤ」が分布している。「仮定形+バ」(-eba形)は、これらの地域で予測的条件文(GAJ167「明日雨が降れば船は出ないだろう」)なども担う形式である。2節で述べたように、全国の多くの方言で、共通語の「ば・と・たら・ては」が担う意味領域(反事実的条件、予測的条件、総称的条件、事実的条件)については、その間で共通の形式が現れることがあるが、「なら」が表す意味領域(認識的条件)についてだけは、それらとは違った形式が当てられている。その中で上記地域の「仮定形+バ」(-eba形)は、認識的条件文とその他の条件文をともに担っており、その用法の広さが注目される。

このように広い用法を持つ形式として、他に、佐賀県等の九州北西部に分布する「ギー」がある。「ギー」の意味用法には地域差があるが、最も広い用法で用いられる佐賀県西部方言では、反事実的条件、予測的条件、総称的条件、事実的条件(「タギー」の形をとる)、認識的条件のすべての用法をカバーしている。(三井2009・2011)

次に図2によってFPJDの分布をGAJと対比しながら見ていく。FPJDでも、全体として、断定の助動詞に由来する、あるいは断定の助動詞を含む形式が全国的に分布している点には変化がない。その中で、「カクンヤッタラ」は、GAJと比べて、兵庫県から鳥取県東部、瀬戸内海沿岸から四国にかけてという、主に西側の地域に領域を広げている。

一方、古代中央語の代表的仮定表現形式である「未然形+ば」と同形の「カカバ」はほとんど姿を消し、本土では岩手県遠野市の1地点のみとなった⁽⁴⁾。ただし、沖縄本島の「カカラバ類」は健在である。形容詞の未然形活用語尾「カラバ」を語源とする「カラ」も、GAJでは青森県、秋田県、山形県に分布していたが、FPJDでは秋田県由利本荘市の1地点のみとなった。

また、予測的条件文など他のタイプの条件文も担う形式である、「仮定形+バ」(-eba形)の融合形「カキヤ」もほとんど見られなくなった。中国地方から九州にかけての地域で、非融合形「カケバ」を含め、山口県に2地点、宮崎県に3地点、熊本県に1地点のみ残り、高知県、および、岐阜県と長野県の県境地域で

は消滅した。

GAJからFPJDへの変化として、「ナラ」「ダラ」「ンヤツタラ」など断定辞を含む形式は、分布の変化はあるものの全体として安定している一方、「カカバ」(-aba形)、「カクカラ」、「カキヤー」(-eba形の融合形)といった、断定辞を含まない形式は大幅に減少して、ほとんど消滅しようとしている。ただし、断定辞を含まない形式であっても佐賀県等に分布する「ギー」は狭い地域ながら分布を保っている。

5. 安定している形式と衰退した形式の特徴 —時制の対立の有無—

分布を保っている「ナラ」「ダラ」「ンヤツタラ」など断定辞を含む形式と「ギー」が共通して持ち、衰退した「-aba形」「カラ」「-eba形」が持たない特徴は、時制の対立である。「ナラ」「ダラ」「ンヤツタラ」「ギー」には、「タナラ」「タゴツタラ等」「タンヤツタラ」「タギー」というタ形が備わっていて、過去時制を表しうる。これ対して、「-aba形」「カラ」「-eba形」はタ形をとらず、従属節内に時制の対立をもたない。

3節で見たように、認識的条件文は、「前件事態そのものは、既に実現している（または実現が確実である）が、その真偽に付いては話し手は知らず、話し手の認識においてはまだ未知の事態である」ような条件文とされる（前田2010: 7）。GAJ 133/FPJD G-051の調査文「手紙を書くなら、字をきれいに書いてくれ」では、「手紙を書く」という前件の事態は未実現だが、話し手はそれが実現することを前提として後件の要求を述べている。しかし認識的条件文は、他の仮定条件文と異なり、このように前件が未実現の場合だけでなく、前件にすでに成立した過去の事態（ただし、話し手はその真偽を確認していない）を取ることもある（むしろその方が典型とされる）。この場合、共通語ではタ形が用いられる。

GAJでは、このような過去の認識的条件文は調査項目に含まれていないが、FPJDでは「（「二日前に手紙を出した」と聞いて）二日前に出したなら、そろそろ届くはずだなあ」（G-052）という文で調査を行っている（9節図3に地図）。この文で、前件の「二日前に（手紙を）出した」という事態は過去に成立しているが、話し手はそれが本当に成立しているかどうか知らない。「-aba形」「カラ」「-eba形」といったタ形を取らない形式は、このような確定した過去の事態を前件にとる認識的条件文を、少なくとも明示的には表すことができないと考えられる。

ここで実際の用例を見てみる。船木（2017）は、認識的条件文に「-eba形」が用いられる高知県高岡郡中土佐町久礼方言の条件表現体系を調査し（2011年調査、話者は1951年生の男性）、次のような回答を得ている。

（1）アス アメガ フリヤー フネワ デンロー。〈明日雨が降れば、船は出

ないだろう。〉予測的条件文

- (2) ヤマトサンガ クリヤー ジブンモ イコカ。〈[今日の飲み会] 山本さんが来るなら、私も行こうかな。〉認識的条件文・前件未実現
- (3) テガミオ {カキヤー／カクガヤッタラ} リグッテ カケーヤ。〈手紙を書くなら、[字を]きれいに書いてくれ。〉認識的条件文・前件未実現
- (4) トナリエ {ハイリヤー／ハイッタエ} ウチモ キオ ツセント イカン。〈[隣の家に泥棒が入ったと聞いて] 隣に入ったなら、うちも気をつけないといけないな。〉認識的条件文・前件過去

予測的条件文((1))、前件が未実現の事態の認識的条件文((2)(3))とも、「-eba形」の「フリヤー」「クリヤー」「カキヤー」が使われており、さらに、前件が過去に成立した事態である認識的条件文((4))でも、タ形を用いない「-eba形」の「ハイリヤー」が回答されている(併用の「ハイッタエ」は「入ったれば」に由来する形式)。(4)では過去の事態が過去形でマークされずに表現されていることになる。この回答について船木(2017: 78)は、「文脈上過去の事実と捉えられているようである。あるいは「隣へどろぼうが入るほど物騒である」という時間超越の事態を仮定してこのような表現が可能になっているのかもしれない。」とする。他の調査文への回答を踏まえると、中土佐町の「-eba」形は、未実現、実現を問わず、前件が成立した後に後件が成立するというタイプの条件文を表すとも考えることができそうである(三井2017)。この方言の体系では、認識的条件文という表現類型が分化していない。

6. 認識的条件専用形式の分化

認識的条件文は、中央語史において、「なら(ば)」の発生と準体助詞の発達によって明示的に表現されるようになった後発の構文である。鈴木(2017)によると、古代語においては、「未然形+バ」が認識的条件文として解釈できる文脈で使用される場合はあるものの、この形式で表される条件文の意味は圧倒的に一般的な仮定条件文(予測的条件文: 前件の未実現事態が実現した場合に生起する結果を後件に述べたもの)であり、発話時の時点で前件事態の成立が決定している例(G-052がこれにあたる)も、発話時以降に前件が成立することが発話時に見込まれる例(GAJ133/G-051がこれにあたる)も見出しにくいという。このことは、古代中央語においては、認識的条件文という表現類型も、それを表す専用の形式も、仮定条件文の中で未分化であったことを示す。中央語では古代語から現代語に移り変わる過程で認識的条件文とそれを表す専用形式が分化・発達した。矢島(2017)によれば、「ならば」が時制の対立を確立し、ほぼ認識的条件専用となったのは近世後期に至ってからのことであるという。地理的変異に関しても、このような流れを念頭に置いて解釈を行うことは有効であろう。

中央語史の知見を踏まえると、GAJとFPJDとの間の変化は、全国的な、認識的条件文を表す専用形式の分化の進行と確立・完了と位置づけられる。FPJDで衰退した「カカバ (-aba形)」「カクカラ」「カケバ (-eba形)」といったル形とタ形の対立のない形式は、GAJ段階で、「手紙を書くなら、字をきれいに書いてくれ」のような、前件が未実現の事態であり、発話時以降に前件が成立することが発話時に見込まれる場合に使用されていた。特に-aba形は、むしろこのような、前件が未実現である認識的条件文に偏って使用されていて、この点、古代中央語の「未然形+ば」と用法が異なる。一方これらの形式は過去形を持たないため、「二日前に出したなら、そろそろ届くはずだ」のような、前件がすでに成立した事態である認識的条件文では、もし使用されたとしても、前件が既実現であることを明示的に示さない。これに対して、断定辞を含む形式（「カクナラ」「カクゴツタラ」「カクンヤツタラ」等）はタ形を持ち、それが過去時制を担う場合、前件が過去の事態であることを明示することができる。また「断定」という意味は、「話し手の判断の仮定」という認識的条件文の意味とも適合する。この両者の交代は、形式が交代しただけではなく、認識的条件文という表現類型とそれを担う専用形式の確立と位置づけることができる。なお認識的条件文に用いられる「-eba形」は、一般的な仮定条件文（予測的条件文）の用法を未分化に併せ持っていた。したがって「-eba形」が衰退した方言に関しては、認識的条件文という表現類型の分化の動きがより明瞭に生じたということになる。

認識的条件文のGAJとFPJDとの間の変化についてまとめると、タ形のない形式が本土ではほぼ消滅し、他方で、①断定辞を含み、②時制の対立のある形式が全国的に認識的条件文専用形式として定着した。これによって、認識的条件文という表現類型、および認識的条件文を担う専用形式の分化が進行し、本土ではほぼ確立・完了した。

7. 九州北西部方言の「ギー」

なお、佐賀県等九州北西部に分布していて、FPJDでもあまり衰退の見られない「ギー」は、タ形「タギー」をもち、少なくとも佐賀県西部方言においては過去形として機能している。次に佐賀県武雄市方言の例を挙げる（2009・2010年調査、話者は1928年生の女性・1933年生の男性）。

- (5) アシチャ アメン フーギバイ フネノ ズンモンヤ。〈明日雨が降れば、船は出ないだろう。〉予測的条件文
- (6) キューノ ノミカタニヤ ヤマモトサンノ キヤー ギバイ／ナイバ | オイモ イコーカニヤー。〈今日の飲み会、山本さんが来るなら、私も行こうかな。〉認識的条件文・前件未実現
- (7) トナリー ハイツ タギナタ／タナイバ | ウチモ ユージンシェンバイ

ンカクサン。〈[隣の家に泥棒が入ったと聞いて] 隣に泥棒が入ったなら、うちも気をつけないといけないな。〉認識的条件文・前件過去

予測的条件文((5))、前件が未実現の事態の認識的条件文((6))とも、「ギー」が使われる(「ギー」は、「ギバイ」「ギナタ」のように様々な形式が付加されることが多い)。そして、前件が過去に成立した事態である認識的条件文((7))では、タ形の「タギー」が用いられる。ただし、過去の認識的条件は「タギー」「タナイバ」とも、話者によっては使いにくいことがあるようである(三井2011・2017:194)。また、認識的条件文には「ナイバ」が併用される。

「ギー」は断定辞を含まないので、認識的条件文を担う全国の有力な形式を持つ「断定辞を含み」「時制の対立がある」という二つの特徴のうち、前者を欠く。また、認識的条件の専用形式ではない。むしろ佐賀県西部以外の地域では、認識的条件には使われず、予測的条件等その他のタイプの条件文に使われる形式である。他の調査文への回答を踏まえると、武雄市方言の高年層では現在、認識的条件文という表現類型と専用形式の分化の途上にあるようである(三井2017)。

ところで、武雄市方言の若年層話者には、別の形で、認識的条件文の専用形式の分化が見られるようになっている。これは、予測的条件文には「ギー」、認識的条件文には「ンヤギー」を用いるというものである(2010年調査、話者は1986年生の女性)。

(8) オトートガ ヨーチエンニ ハイルギ カゾクデ リョコーバ ショー。

〈弟が幼稚園に入ったら、家族で旅行をしよう。〉予測的条件文

(9) ヨム {#ギー／ンヤギ／ンヤッタラ} カシチャーバイ。〈[自分が今読んでいる本を読みたそうにしている友人に] 読む(の)なら、貸すよ。〉認識的条件文・前件未実現

(10) トナリニ ハイッ {#タギー／タンヤギー／タンヤッタラ} ウチモ キオツケンバネ。〈[隣の家に泥棒が入ったと聞いて] 隣に入ったなら、うちも気をつけないといけないな。〉認識的条件文・前件過去

「タラ」と「ンヤッタラ」と同じように、予測的条件で用いる形式「ギー」に準体助詞+断定辞「ンヤ」を前接して、認識的条件を表す形式「ンヤギー」(より方言的には「トヤギー」)としている。これは、認識的条件を表す形式として、全国的に断定辞を含む形式が安定している、という傾向に沿う変化であり、この方言の中で独自の体系化が行われているものと見ることができる。

このように、認識的条件文の専用形式として、①断定辞を含み、②時制の対立のある形式が定着する、という方向性は、個々の方言の中で生じる変化にも見出される。

8. 認識的条件文の分化という方向性の例外

また、奄美諸島と南琉球地域には、「カキティカー」「カカディヤティカー」などの「ティカー」という特有語形がある。「ティカー」類は認識的条件文だけでなく、予測的条件文でも使われる。この「ティカー」類が全域で使われている宮古地域の回答を、認識的条件文と予測的条件文について、GAJとFPJDとで対照させて示すと、表3のようになっている。

この回答を見ると、GAJでは、予測的条件文と認識的条件文に別の形式が使われていたが、FPJDでは、GAJで予測的条件文に使われていた形式が認識的条件文にも使われるようになっていて、両者の区別がなくなっているように見える。

伊良部の回答を例にとると、GAJでは予測的条件文(167図「降れば」)が「fuzitiga:」、認識的条件文(133図「書くなら」)が「ka:dijatiga:」と、別の形式が回答されている。前者は「fuzi=tiga:」(降る=条件)、後者は「ka:di=ja=tiga:」(書く-意志のモダリティ=断定=条件)と分析され(陶2018)、意志のモダリティと断定辞を含んでいることから、後者が認識的条件文を担う専用形式であることが理解される。ところが、FPJDでは、予測的条件文(G-045「降れば」)が「fu: tfiga:」、認識的条件文(G-051「書くなら」)が「kaki= tfiga:」で、いずれも「動詞=条件」という、GAJでは予測的条件文に現れた形式が回答されている。このように、GAJとFPJDのあいだで、予測的条件文と認識的条件文の形式が合流する方向の変化は、本土方言の動向と異なる。背景について、体系的な把握を行いたい⁽⁵⁾。

表3 琉球宮古方言の予測的条件文と認識的条件文の形式

GAJ			FPJD		
平良市字大神	予測	futika:			
	認識	kakatijatiga:			
伊良部村字仲地	予測	fuzitiga:	伊良部町	予測	fu:tfiga:
	認識	ka:dijatiga:		認識	kakitfiga:
平良市字下里	予測	fu:zikka:	平良市	予測	putsukara, putsuka:, purju:iba
	認識	kakadiatsika:		認識	kakitsuka:
下地町字上地	予測	fuzika:	上野村	予測	fusska:
	認識	kakadijakka:		認識	kakska:

予測：明日雨が降れば船は出ないだろう。(GAJ167図／FPJD G-045)

認識：手紙を書くなら字をきれいに書いてくれ。(GAJ133図／FPJD G-051)

9. 過去の認識的条件文の全国分布

最後に、FPJDで新たに調査が行われた、過去の認識的条件文を担う形式の全国分布を見て、過去時制の形式が全国でどのようなになっているかを把握しておく。調査文は「[[2 日前に手紙を出した] と聞いて] 2 日前に出したなら、そろそろ届くはずだなあ」(G-052)である。発話時点で前件事態の成立が決定している(「出した」)が、話し手は事態の成立を確認していない(「出した」かどうか真偽を知らない)という内容の文である。共通語では「たなら」と過去時制をとる⁽⁶⁾。これまで見たように、認識的条件文を担う条件形式は、全国的に、断定辞を含み、時制の対立を持つものが中心である。しかし一部に「-aba形」「カラ」「-eba形」のように時制の対立を持たない形式が用いられている。5 節で高知県中土佐町方言の例を挙げたが、その場合、この調査文のように、前件事態がすでに成立している文で、どのような形が現れるか注目される。

図 3 を見ると、全国的に、前件が未実現の事態である認識的条件文 G-051「書くなら」(図 2)に現れた形式のタ形が広く分布している。関東・中部と中国・四国北西部・九州の「ダシタナラ」「ダシタンナラ」、東北の「ダシタゴンタラ」「ダシタンダバ」など、近畿・四国の「ダシタンヤッタラ」などである。いずれも断定の助動詞に由来する形式や、断定の助動詞を含む形式である。

一方、G-051「書くなら」(図 2)で、「-aba形」「カラ」「-eba形」(融合形含む)という、タ形を持たない形式が用いられた本土の地点の、G-052「出したなら」(図 3)の回答は表 4 のとおりであった。

すべての地点で、G-052「出したなら」には「-aba形」「カラ」「-eba形」は現れず、ほとんどの地点で断定辞に由来する形式のタ形が回答されている。6 節で、ル形とタ形の対立を持たない形式は、前件がすでに成立した事態であることを過去形によって明示することができず、より適合する、断定辞を含む形式に交替していったのではないか、という見通しを述べた。上記の結果は、この見通しを支持する。

一方沖縄本島では、本土と異なり、G-051「書くなら」で、「カクラバ類」(融合語幹の「未然形+ば」)は健在であった。これらの地域での G-052「出したなら」の回答には、「出したれば」に対応する形式が現れる(那覇市首里の語形は、「ンジャチャーレー」)。本土方言では、「[たり]」の已然形+ば」に由来する「タレバ」「タリヤ」「タラ」は主に事実的条件文を担うが、沖縄本島には事実的条件文を担う専用形式「クトゥ」がある。このような本土方言と異なる体系的背景に支えられているため、沖縄本島の認識的条件文を担う「-aba形」は安定していると考えられる。



図3 2日前に出したなら, そろそろ届くはずだ (認識的条件文・過去) (FPJD G-052)

表 4 FPJD G-051 でタ形のない形式を回答した地点のG-052の回答 (本土)

地点	G-051 書くなら	G-052 出したなら
岩手県葛巻町	▲カゲバ	
		◇ダシタハンダラ
岩手県遠野市	▲カガバダシ	
		ダシ…タラバ
秋田県本荘市	▲カグガラ	「ダシタガラ」を誘導したところ原因・理由の意味で回答
	□カグナンゝバ	◇ダスイ…タナンゝバ
	□カグナナンゝバ	◇ダスイ…タナナンゝバ
	□カグンナンゝバ	
		◇ダスイ…タンデアッタンゝバ
	カグドシエンゝバ	
	カグガッタラ	ダスイ…タガッタラ
山口県小郡市	▲カキヤー	
		◇ダシタナラバ
山口県宇部市	▲カキヤー	
	□カクナラ	◇ダシタンナラ
大分県安岐町	▲カキヤ	
	□カクンナラ	◇ダシタナラ
	カクゴテアリヤー	
		データラ
宮崎県北浦町	▲カキヤー	
		デーチョッタラ
宮崎県高千穂町	▲カケバ	
	□カクトナラ	◇データナラ
宮崎県宮崎市	▲カケバ	
	□カイケクルットナラ	
	□カクトナラ	◇ダシタツナラ
熊本県五木村	▲カケバ	
	□カクナラ	◇ジャータナラ

▲ -aba形、カラ、-eba形 (タ形を持たない形式)

□ 断定辞を含む形式のル形 ◇ 断定辞を含む形式のタ形

無印 その他

10. おわりに

認識的条件文は、中央語において、古典語の「未然形+ば」が広く仮定条件を担った状況から、中世を経て、近世末に「ならば」による表現が確立した。表2の条件表現の全国的地域差に示したように、GAJ段階で、多くの方言で、認識的条件文は、他のタイプの条件文とは異なる形式が担っていた。FPJDではその傾

向がさらに強まり、①断定辞を含み、②時制の対立を持つ形式が残り、それ以外形式は、本土においては著しく衰退した。これは、前件の事態はすでに成立しているが、話し手の認識においては未知の事態である、という認識的条件文の特徴のため、従属節内にテンスの対立があることが、認識的条件の意味を安定して表す上で求められ、そのような形式に収斂していくという変化であると捉えられた。本稿では全国分布の経年変化という観点から、大きな変化の流れをつかむことを念頭に考察を行ったが、各地の方言では、方言内部の体系や近隣方言との関係等によって、異なる方向の変化もあり得るだろう。各地方言の体系記述と合わせ、そういった変化の方向を探っていくことは今後の課題である。

参考文献

- 有田節子 (2007) 『日本語条件文と時制節性』 くろしお出版
- 有田節子 (2017) 「日本語の条件文分類と認識的条件文の位置づけ」 有田節子編『日本語条件文の諸相—地理的変異と歴史の変遷—』 くろしお出版、3-32
- 大西拓一郎編 (2016) 『新日本言語地図』 朝倉書店
- 国立国語研究所 (1963) 『沖縄語辞典』 大蔵省印刷局
- 国立国語研究所 (1989-2006) 『方言文法全国地図』 1～6、国立印刷局 (pdf版 https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-pdf_index.html)
- 下地理則 (2018) 『南琉球宮古語伊良部島方言』 くろしお出版
- 鈴木泰 (2017) 「古典日本語における認識的条件文」 有田節子編『日本語条件文の諸相』 くろしお出版、85-114
- 竹田晃子 (2017) 「東北方言の認識的条件文」 有田節子編『日本語条件文の諸相』 くろしお出版、213-238
- 津波古敏子 (1997) 「琉球列島の言語 (沖縄中南部方言)」 『言語学大辞典セクション：日本列島の言語』 三省堂、369-388
- 陶天龍 (2018) 「南琉球宮古語池間方言における4つの条件形式について」 『日本語学会2018年度秋季大会予稿集』、27-34
- 日高水穂 (2003) 「条件表現「すれば」「したら」「すると」」 野田春美・日高水穂『現代日本語の文法的バリエーションに関する基礎的研究』 科学研究費研究成果報告書、81-94
- 日高水穂 (2017) 「認識的条件文の地理的変異の類型」 有田節子編『日本語条件文の諸相』 くろしお出版、159-184
- 船木礼子 (橋本礼子) (2017) 「中土佐町久礼方言の条件表現体系—バ融合形の用法を中心に—」 『神女大國文』 28、84(1)-67(18)
- 前田直子 (2010) 「条件表現共通調査項目解説」 方言文法研究会編『『全国方言文法辞典』のための条件表現・逆接表現調査ガイドブック』 科学研究費補助金研究成果報告書、1-12
- 三井はるみ (2009) 「条件表現の地理的変異—方言文法の体系と多様性をめぐって—」 『日本語科学』 25、143-164
- 三井はるみ (2010) 「条件表現の全国分布概観」 方言文法研究会編『『全国方言文法辞典』のための条件表現・逆接表現調査ガイドブック』 科学研究費補助金研究成果報告書、13-25
- 三井はるみ (2011) 「九州西北部方言の順接仮定条件表現形式「ギー」の用法と地理的分布」 『國學院雑誌』 112-11、26-39
- 三井はるみ (2016) 「95降れば、96起きれば、97書けば、98行くと、99行ったら、100行ったら、

101書くなら」大西拓一郎編『新日本言語地図』朝倉書店、190-203

三井はるみ (2017)「九州・四国方言の認識的条件文 —認識的条件文の分化の背景に関する一考察」

有田節子編『日本語条件文の諸相』くろしお出版、185-211

三井はるみ (2019)「条件表現の全国分布に見られる経年変化 —予測的条件文の場合—」『国語研究』82、40-59

矢島正浩 (2017)「中央語におけるナラバ節の用法変化」有田節子編『日本語条件文の諸相』くろしお出版、115-138

注

- (1) 日高 (2017) は、この点に着目し、日本語諸方言の認識的条件形式の分化の類型の整理を行っている。
- (2) 竹田 (2017) は、このような岩手県方言の「未然形+バ」と類似した形式 (-aba形) の由来について、過去の方言文献資料・調査資料の分析に基づき、古代中央語の残存ではなく、後述の「カラ」と同じく形容詞の未然形活用語尾「クアラバ」を語源とし、発音の変化によって生じたものと指摘している。
- (3) ただし、長野県秋山郷、八丈島、奄美大島では、予測的条件文「明日雨が降れば船は出ないだろう」でも「フラバ」などの-aba形が回答されている。
- (4) 岩手県のこの形式の由来については注(2)参照。
- (5) 下地 (2018: 312) では、理由・条件副助詞-baと比較して「条件の用法のほとんどは別の条件副助詞-tigaa が担っており、(引用補: -aba形の) 使用頻度は極めて低い。(略) -baの条件用法と-tigaa の機能的な差異がはっきりせず、それは上記の通時的なプロセスに起因しているのかもしれない」と、「未然形+ば」「已然形+ば」に由来する形式と比較して、条件の用法では-tigaaが優勢であることが述べられている。
- (6) 「ている」を付して状態述語化すれば、「ていれば」「ていたら」も可能である。図3でも、主に西日本に「アスペクト形式+バ／タラ」形式が散見される。

付記 図1～図3の作成には、国立国語研究所によるデータとプログラムを利用した。

本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」、および、JSPS科研費 (26244024) による研究成果の一部である。